君に会いたい

夏野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君に会いたい

【Ｎコード】
Ｎ６２５０Ｘ

【作者名】
夏野

【あらすじ】
王であるブレンに絶対の忠誠と献身を誓った、〈連者〉ヨル。
王から信頼と無二の友人という栄誉を受けながらも、ヨルがブレンに素顔を晒したことはなかった。
「ずっと側にいる」という幼き日の約束を叶えるため、ヨルは身分も性別も名前をも捨て、ブレンの側にいる。
自分を殺すことで、成り立つ約束に満足したはずのヨルだったが、互いの成長と同時にやがて揺らぎ始める・・・

夜に消える、聞く者のいない呟き

私は武器だ。
道具だ。
最強の力だ。

あなたが望むのなら、
何にも屈せず、切れないものはない剣になろう。

あなたが望むのなら、
全てを捨て感情のない道具にでもなろう。

あなたが望むのなら、
親でも子でも殺してみせよう。

あなたが望むのなら、
全てを奪い、あなたに捧げよう。

私はあなたの優しさも、献身も、関心も、記憶も、ましてや愛情もいらない。

わたしが、あなたに望むことが一つだけ。

ただ、あなたの側に置いていて欲しい。

それだけだ。

序章

呼吸を一つ。

瞼を開き、呪文のように唱える。

私は武器。
最強の武器だ。
折れることなく、切れぬ物はない、彼の人の剣だー。

震える心が凪ぐ。
そう、私は彼の人の剣。
怯えることも、退くことも許されない。
ただ、目の前の敵を殲滅するだけだ。
ー全ては私の統主〈ル？ハイネル〉のためにー

思考を現実に戻し、意識は仲間である《連》に、視線は前方の渓谷に広がる化け物に向ける。
化け物、ー亜竜ー。
名前こそ竜を冠しているが、本当のところ竜かどうかは判明していない。
化け物の姿は千差万別で分類することが難しい。
ある個体は、ウロコに尾を持つ、それこそ竜のようなもの。
また、ある個体は鯨のような滑らかな体を持ち、透ける皮膚と草食動物のような歯をもつもの。
果ては虫のようなものもいれば、植物のようなものもいる。
共通することは、空を駆け、人に害をなし、空の向こうからやってくるということだけだ。
神話の時代に存在した竜とは空を飛び、人を襲ったということと以

外共通点はない。
しかし、他に呼ぶ術を持たなかった先人は竜に似て非なるモノ、亜竜と呼ぶようになった。
なにより、現実に亜竜達はおとぎ話のように荒唐無稽で現実離れした存在だった。
亜竜達は、知覚することは出来ても決して触ることが出来なかったからだ。
亜竜の牙や爪は人には届くが、人は亜竜に触れることはおろか、斬りかかることもその攻撃から身を守ることも出来ない。
ある、一定の手段を除いては。

今、眼前には亜竜の《艦隊》と呼ばれる大規模な群れが広がっている。
騎士級、兵士級と呼ばれる中級種が鴉のように空を覆い、都市級と呼ばれる超大型種が彼らの王のように泰然と大空を駆っている。
王であり、私の《連》の統主であるブレン＝皇＝ハイネルが告げた。
「前方向に展開中の亜竜艦隊を討つ。
伐目標は、前方の都市級亜竜の殲滅。神経信号と級種からみておそらくこいつがこの艦隊の頭だ。
遊撃官は、兵士級、及び騎士級亜竜の威嚇・牽制。
守護官は、出力の6割を都市級亜竜の隔離へ、残り3割を執攻官、1割を私と遊撃官の守護にまわせ。
執攻官は、都市級の核を発見せよ。」
「了解です、我が君〈ダー・ル・ハイネル〉。」
「了解です、我が君〈ダー・ル・ハイネル〉。」
「了解です、我が君〈ダー・ル・ハイネル〉。」
私同様、平坦な返答を返すのは《連》の仲間だ。
その声色に戦闘前の怯えや高ぶり、ましてや個性を見るのは難しい。
私は、視線を上げ声の主達を見やる。

顔色はわからない。
彼らは私と同じ革のローブのフードを深くおろし、わずかに見える筈の口元も高襟のコートによって隠してしまっている。
同じ衣装に身を包んだ彼らは没個性的で、私達3人の差異をあえていうなら身長の高低差だろう。他の2人は同じくらいの身長だが、私は靴で誤魔化しているものの、連の中では1番身長が低い。
没個性な私達とは反対に、主である統主のブレンは、白の軍服を着用し、顔をさらしている。
癖のある栗茶の髪にややたれ目の緑の瞳。王というよりも、どこぞの羊飼いと言われたほうが納得できる優しげで、整ってはいるものの、平凡な顔立ちだ。
しかし、今はその優しげな顔も厳しく歪められている。

私は一方のローブの人物、守護官と呼ばれる男に近づくと、微かに肩を相手に触れさせた。
〈ガイエン。統主はあのようにおおせだが、私の守護は1割で構わない。残りは統主に回してくれ。〉
〈お前またかよ。統主崇拝もいいが命令不服従だぞ。〉
先程の、色のない声音とは違う
気が短く血気盛んそうな男性の声が頭に響く。
《連》能力のある者が体に直接触れることで可能となる《心話》だ。触れずに会話することも可能だが、その場合、連の仲間全員に会話が筒抜けになるので、今回のように内密な会話の場合には適さない。
〈無視かよ。ったく。わかったよ。せいぜい統主さまを守らせていただきますよ。〉
毎度のことなのでガイエンが折れるのは早かった。
〈すまない。恩にきる。〉
感謝の意を込めて、《心話》でガイエンの心を少し《押す》。
そのまま《連》の先頭に立つように歩をすすめその際、もう1人のローブの人物である遊撃官に近づき、そっと指を当てる。

〈ラウナ、私の援護射撃はしなくて構わないから、統主の援護を頼む。〉
〈あ？だめ。〉
優しげで柔らかな声とは対照的な即座の否定。
〈さすがのヨルもあの数の亜竜相手に援護なしで無傷て訳にはいかねーだろ？〉
〈問題ない。操れる飛礫の数を増やした。〉
心話と同時に背嚢から地面に飛礫をまき散らす。
キラキラと光を浴びて輝くこの鉱石は、宝石として用いれば非常に高価なものとして重宝される。しかし、武器として使用された場合、最も堅く、またカット次第では肉を切り裂く鋭利な刃となる。
私はその凶器の塊に意識を伸ばし、浮遊させる。
私の意識と連結させたこの礫は文字通り私の手足となり、また、武器になる。
「あれ？執攻官。飛礫の数増えていないか？」
目ざとく気づいたブレンが私に問いかける。
「はい。最大２００個扱うことが可能となりました。」
たんたんと事実だけを告げる。その言葉にブレンが目を見開く。
「すごいな！以前の倍じゃないか！！」
ブレンが賞賛の笑顔を私に向ける。
子供のころから変わらない邪気のない笑顔に、血反吐を吐く特訓の日々が報われたのを感じる。しかし、そんな変化は顔にも声色にも、もちろん出ない。
〈そういうことだ、ラウナ。自分の面倒は自分で見る。〉
〈う～ん・・・そこまでされちゃうとなんにも言えねーな。了解。誠心誠意統主の補佐させていただきますよ。〉
〈ありがとう、ラウナ。〉
「ブレン。準備整いました。お願いします。」
「わかった。」
ブレンが、手袋を脱ぎ捨て両の手を合掌する。

瞬間、大気が揺れ緑色の電撃のようなモノが統主の腕を走る。
「〈接触領域〉展開！！」
叫ぶと同時に、地面に拳を叩き込む。
ブレンの拳を中心に青白い電撃と七色の光が周辺を覆い、亜竜達を包み込む。同時に不快感からか亜竜達が悲鳴を挙げる。
光は一瞬で収束し、亜竜は変わらず傷を負うこともなく存在している。
そう、先ほどより確かな存在感を持って。
「執攻官！亜竜の具現化に成功した！頼むぞ！」
その言葉を最後まで聞かず、私は崖から飛び降りた。
否、大空へ跳び上がった。
《連者》である私の常人離れした脚力で体は落下せず、空へ舞い上がり真っ先に襲いかかってきた兵士級亜竜の眼前へと運んだ。
私は礫の一つを操り、目を潰す。確かな手応えを感じ統主の力が、間違いなく効いているのを確信する。
そしてその勢いを利用し亜竜の背に着地。礫を2つ操りコウモリに似た翼の片翼を切り落とす。兵士級亜竜が力を失い落下すると同時に、その背を蹴り落とし、上昇。
《連者》の証である灰色の革のマントが風を受けてバサバサとはためく。
操る礫達は私を中心に重力があるかのように、私の周囲を取り囲み共に上昇する。
遅れて襲いかかってきた4匹の亜竜達を上昇しながらギリギリまで引き寄せ礫を一斉に放つ。
3匹が落下して行く中、1匹の騎士級は致命傷を避けたのだろう。落ちることなく、顔の半分を占める巨大な口を開き毒の霧を吐く。
私は礫を6個操り盾のような形状を作り勢いと共に弾き飛ばす。同時に騎士級に刺さった礫を糸がついているかのように手繰り寄せ、一気に亜竜との距離を詰める。牛をも蹴り殺す脚力で頭部を蹴り落とし、そのまま上昇する。

ー雑魚にかまっている時間はない。ー
ブレンの接触領域展開は無限には続かない。効果が切れた時点で、接触不可能となりこちらは無力と化す。
なによりも、亜竜達は異常の原因を統主と見なし集中的に狙っている。時間がかかればかかるほど統主の身が危なくなる。
通常、亜竜達は群れない。
たまたま2、3頭が同じ地域に存在し人を襲うことはあるが、そこには群れとしての秩序も法則もない。
しかし、時折首領と思われるモノに率いられ軍隊並みの数と統率で都市を襲う。
今回の襲撃もソレだ。
首領を潰してしまえば、群れは統率を失い、皇国最強である私の《連》の敵ではなくなる。
襲いかかる亜竜を礫で切り裂き、屠り、時折脚力で蹴り落としながら、礫と亜竜を足場に空を自由に飛び回る。
亜竜を30匹ほど墜としたあたりで、とうとう都市級亜竜が、私を最大の敵と見なしたのか空が揺れるような唸り声と共に襲いかかってくる。
ーデカイ・・・!!ー
眼前に迫りくる異形に弱い心が震える。しかし、
「私は彼の人の剣だ!怯えることも、退くことも許さない!!!」
待機させていた数十個の礫を一斉に都市級の顔に叩きつける。
反動で私の体は一気に亜竜よりも高く舞上がる。
すかさず礫を1つ亜竜の背中に突き刺し、自らを礫に引き寄せる。
そして回転して威力を殺し亜竜の背に勢いよく着地する。
ーこいつの〈核〉はどこだ!?ー
都市級以上の大型の亜竜は必ず核と呼ばれる心臓のようなものが存在感する。
大型種はこれを用い、小型の亜竜達を操る。
そしてこの核の破壊とは文字通り亜竜達の“散開”を意味する。

突如、地面である都市級亜竜の背が激しく揺れる。自分の体に付着した私という異物を落とそうと体を激しく揺すっているのだ。
まるで大型地震のような揺れだが、《連者》の中でも最強の肉体と平衡感覚を持つ私にとっては風に吹かれるようなものだ。
うるさい、と言わんばかりに礫をまたしても顔めがけて叩き込む。
鋭い叫び声とともに、ガラスをひっかくような不愉快な波動。
大型種が小型種に対して発する、念話のような信号だ。
恐らく、救難信号なのだろうがその出処を見逃す私ではない。
人間でいうところの頚椎のあたり、そこから微かだが不快な波動が発せれれている。
駆け出すと同時に、そこを礫で円形に囲み、勢いをつけて肉を抉り出す。
飛び散る肉片と同時に亜竜の血液と呼ばれている光の粒が一斉に吹き出し、視界を覆う。しかしその向こうには確かに、星の光のような白く輝く球体が肉に埋れて燐光を放っているのが見えた。
『ブレン！〈核〉を発見しました！』
念話でブレンに向かって叫ぶ。『よくやった！執攻官！！では、いくぞ！！』
優しげでありながら、自信に溢れた声が聞こえると同時に、馴染みの殴り倒されたような衝撃が私を襲う。
体は殴り倒されてはいない。
精神が統主であるブレンによって押し倒されたのだ。
私の体は、ブレンに支配され動作の主導権が奪われる。
これが《連》の主である統主の所以。
統主は支配下にある《連者》の体を文字通り支配しすることができる。
それ故の最強。
そしてそれ以上に・・・
「滅びろ！！亜竜！！！」
私の腕に統主の力の証である緑色の雷と七色の光がまとわりつく。

そしてその腕を全力で亜竜の〈核〉へと叩きつけた。

瞬間、都市級亜竜は光と雷に包まれ、いままでとは比較にならに絶叫をあげて、光の粒となり飛び散った。

そしてその光と雷は大空を駆け巡り、付近にいた亜竜達にも伝染する。様々な断末魔を吐き出しながら多くの亜竜が光の粒となり、霧散した。

亜竜を完全に滅ぼす力。

これが、統主が事実上最強と呼ばれる力だ。

力を放つと同時にブレンの支配から逃れた私の体は、全ての力を使い切ったかのようにピクリとも動かない。

足場を失い落下していく私は、青空に煌めく緑色の雷を見ながらブレンの圧倒的な力に満足しながら、意識を失った。

幼年期の思い出：／／０１

私の１番古い記憶は痛みと共に思い出される。
子供の頃、私はいつも傷だらけだった。
活発な子供にありがちな生傷が絶えない、ではなく打撲、裂傷、骨折といった１つあるだけでも普通の親は大騒ぎするような大怪我の類だ。しかし、私の場合この怪我を負わしているのが実の父親だったため、騒がれることは少なかった。
私は、武門の名門である貴族の８番目の子供として生まれた。
母親は、女児ばかり産み続け最後の私を産み亡くなった。
父親は、母を亡くしこれ以上、自らの後継者が産まれないと分かると、甘やかしていた７人の姉とは別に、私を徹底的に鍛えた。
おそらく父は母をとても愛していたのだろう。母が女児しか産まなかったにも関わらず愛人を作らなかったのだからその愛情の深さが伺いしれる。
そのためだろうか、訓練の最中、時折抑えきれない憎悪を私に向け、容赦なく痛ぶられた。正気に戻れば、おざなりではあるが手当をしてくれたが、ろくに診断もされずに手当された怪我は酷く痛み、また治りも遅かった。
姉たちはそんな私を見て、気の毒そうな顔をするものの、父親同様、大好きだった母を奪ったのが私という思いがあるのだろう、嫌なものを見たというように、眉をしかめ、存在を無視した。
そんなことが日常茶飯事だったため、屋敷に私の居場所はなく、よく深夜に屋敷を抜け出し星空の下で泣いた。
満点の星空はただただ美しく、なぜか見たこともない“母親”を思わせ、より一層私を泣かせた。
父親の愛も、姉達の愛もしらない私にとって、見たこともない母親だけが、私を唯一、無条件で愛してくれる存在に感じたからだ。
星空にはひときわ大きく緑色に輝く星があり、それが肖像画で見た

母親の美しい緑の目と被って見えた私はその星を“おかあさんのほし”と呼びそれを心の支えにし、日々を生きた。

ある日のことだ。
私は、朝から高熱をだしベットに臥せっていた。
いつも怪我だらけで顔を腫らし、子供らしく笑もしない私のことを屋敷の使用人達は好いておらず、世話もおざなりになっていたため、誰も気づかずただの寝坊だろうと、手当もされず放置されていた。
そこに、稽古の時間になってもやってこない私に腹を立てた父親が訪れ、高熱で立つこともままならない私を真冬の訓練場に引き出し、いつも以上に打ち据え、そうしていつも通りその場に放置していった。
当然、私は起き上がることも出来ず、もはや何による痛みか吐き気なのかもわからないまま、その場に嘔吐し気を失った。

次に私は激痛とひどい体の震えで目を覚ました。あたりは一面の闇で、瞳を開けたはずなのに一向に何も映さない視界に、恐怖に似た混乱を起こし、鉛のように動かない体を動かし、もがいた。
立つことは出来なかったものの、体を仰向かせることに成功した私は、一面に広がる星空を見て、今が夜だと悟った。
そして、何よりも美しく緑色に輝くあの星を見て、私は堪らずつぶやいた。
「・・・ぉ、かぁさん・・・」
掠れた声。音を発するだけで体が痛むにも関わらず、私の中でなにかが決壊した。
「・・・ぉかあさん！おがあさん！おがあさん！おがあさん！おがあさんっ！！！！」
温かい涙がとめどなく流れ落ちる。
つらい。
いたい。

かなしい。
くるしい。
さみしい。
こわい。
今まで耐えてきたこの感情達に、私は糸が切れたように耐えれなくなった。
押し込めていた気持ちが一気に吹き出し、私をどこかに引きずり落とそうとする。
心は足掻くが、私にはすがりつく希望という糸がなかった。
そうして、悟った、私はこのまま死ぬのだと。
つらい、
いたい、
かなしい、
くるしい、
さみしい、
こわい、
こわい、こわい、こわい、こわい・・・・!!!
「おかあさんっ!
おかあさんっ
おかぁさんっ
ぉ、かぁさんっ・・・・」
ーわたしは、わたしは・・・・
「死に、たくない、よう・・・・」しゃくりあげ、つぶやいた言葉に、私は自分の望みを自覚した。
そして、私は自分の中に“なにか”を発見した。
目に見えるわけではない。
ただ、たしかに頭の中ではそれは見えており、緑色の光を放って存在していた。
それは、まるで・・・・
「おかあさんの・・・・ほし?」

私はその光に向かって“手を伸ばした”。
とたん、激しい熱が私を包む。
火に焼かれる傷つける熱さとは明らかに違う、内側からくる激しい熱。
「あ・・・あっあぁぁあっ・・・!??」
感じたことのない感覚に私の頭はかき乱される。
しかし、私は本能で“この熱を逃してはいけない”と感じ、伸ばした“手”で緑の光で抱きしめる。
熱はより一層激しくなり、私の手を、足を、睫毛の先をも余すことなく包み、私に宿った。
そう、私に宿ったのだ。
いっときほどの激しい熱ではなく、ただあの緑の光が“燃えている”という感覚だけが残る。
そして、熱は私の力へと変わった。
腕をあげることすらままならなかった私の体は、健常時よりも力に満ち、まるでそこに存在しないかのように軽かった。
私は、勢いよく跳ね上がり自らの体を省みた。
そこには傷はおろか、打ち身ひとつ見当たらない白い肌があった。
そして、気づく。見え過ぎていることに。
先ほどまで、星しか見えない恐怖するほどの暗闇だったにも関わらず、今はほんのりと明かりが宿ったような視界で、訓練場の奥にある、裏の森まで見渡せる。
羽のように軽く、痛みのない体。見えすぎる瞳。
「・・・おかあ・・・さん?」
虫の声はいつもより大きく私の中で響いた。

幼年期の思い出：／／０２

私は自らの身に起こったことが理解できずに、暗闇の中、呆然と立ち尽くしていた。
存在しないかのような軽やかで、
傷も、痛みもない体。
闇の中を映し出す瞳。
かすかな虫の羽ばたきさえも捉える聴力。
私の体のどこかで燃え続ける、緑の炎。
そして、そこから溢れてくる感じた事のない、力、熱量、活力。

現実を理解しきれない頭が、「私は死んだのだろうか？」
という考えに至ものの、
体に溢れる充足感、踏みしめる足下の確かさ、そして何よりも鋭くなった感覚全てがここは現実と告げていた。
それでも幼い私の許容量は溢れ、
私はひとり、暗闇の中立ち尽くしていた。

どれほどそうしていただろうか。
月の位置も大きく動く程時間が経過したころに私の聴力は異音を拾った。

人の悲鳴、怒声だ。

家人のものではない。
何故なら背後にある屋敷ではなく、前方にある裏の森から聞こえてきたからだ。

私は、ふらり、と森に向かって歩を進めた。

心のどこかで、近づくのは危険と理解していたが、許容量を超えてどこか麻痺した私の心は危険なくらい鋭い現実というのを求めていた。

気がつけば、私は全力で森の中を走っていた。
否、疾走というべきだろう。
私の周りの景色は、完全な像を捉えることなく、次々と背後へと回り、川のように流れてゆく。
まるで、馬で駆けているいるような景色。
私は笑った。
漲る力が、私の心から歓喜を引きおこし、無敵になったかのような高揚感を覚える。

暴走する感情とは裏腹に、思考の一部は冷静に先ほどの音源を探っていた。
人の悲鳴に、獣のよう鳴き声、そして木が折れるような、激しい破壊音。
一体、何がおきているのだろうか？
興奮状態は未だ続いていたが、警戒の念が生まれる。
人の悲鳴に破砕音など、尋常ではない。
しかし、私はその時、純粋な好奇心以上に強く惹かれるものを森の奥に感じ、その恐怖に耳を貸さなかった。

早く、早く、早く、側に行きたい。

それは、餓死寸前の体が食べ物の匂いに惹かれるかのように強い魅力を放つものだった。

早く、早く、早く！

どれくらい駆けただろうか？
かなり森の奥まできた筈だが、私の呼吸は全く乱れず、汗一つかいていなかった。
ふいに、強化された私の目が人影を捉えた。
なぎ倒された木々の中に剣を持った傷だらけの男達が3人、そして馬のよう何か。
初めて見る、生物だった。
基本部分はとても馬に似た生き物なのだが、大きさは普通の馬の2倍はあるかのように見える。その背中からは白い白鳥のような大きな羽根が生え、本来馬の首がある場所には、狼の顔に毛深い人の上半身を混ぜたような奇怪な姿をしたものが据えられていた。
狼の体毛に覆われた腕のその先には私ほどの年頃の少年が、首を締められ、吊るされていた。周りの男達はその少年なんとか助け出そうと奮闘しているようだが、まっ
たく刃がたたない。
私は、少年に視線を向けた。
この異常な状態以上に、惹きつけるものが、彼にはあった。
同じ年頃の少年というのは初めて見たが、姉達とそんなに変わらないように見えた。
ただ、女性ではありえない栗色の短い癖っ毛が彼が男なのだろうと私に思わせた。
その時、苦しげに目をつぶっていた彼と唐突に視線があった。
私が視力を強化し、遠方から彼ら見ていたのにも関わらず、彼は確かに私を捉えたのだ。
開かれた瞳は優しげで、
不思議な燐光を放つ緑色だった。
瞬間、私の中で燃え続けていた緑の炎が弾けた。
私は、先ほどより一層加速し、彼らとの距離を一気に詰めた。

剣を持った大人達が、私に気づく程に距離を縮めた時、体が“なにか”を通過した違和感を感じたが、私は減速せず、その勢いのまま、地を蹴り馬モドキに飛び蹴りを放った。
加速をつけた蹴りは、飛び蹴りというよりは、すでに暴走馬車の追突のようなもので、激突された馬モドキの肩は弾け飛び肉片をまき散らしながらちぎれ飛び、同時に少年は馬モドキから解放され地面に投げ出された。
鼓膜を破るような馬モドキの絶叫をききながらも私は普段では考えられないような平衡感覚と力を発揮し、両腕のみで着地、回転しながら体制を崩した馬モドキをさらに蹴り落とした。
蹴りは首にきまり、ゴキリと首の骨が折れた音が私の足に響いた。
馬モドキは泡を吹きながら、轟音と共に崩れ落ち、2、3の痙攣とともに動かなくなった。
私は、怪物が動かなくなったことを確認すると、辺りを見回した。
傷だらけの男達は突然現れ、化け物を倒した私を呆然と見ていたが、私は彼らの視線を無視し投げ出された少年を見つめた。
少年は、咳き込みながらもふらりと立ち上がり、そして私を見据えた。
その、緑の瞳。
さきほど、どれだけ暴れてもけっして乱れなかった私の心臓は、なぜか早鐘を打ち出した。
彼は、はっとした表情で私に駆け寄り、そして、刃を抜いた。
振り下ろした剣は、緑色の光を放ちーーー私の背後に突き立てられた。
背後からは馬モドキの断末魔の叫びとともに白い光の粒が弾け飛び、私の髪をあおった。
「《統主》がとどめをさす前に気を抜くなんて・・・君、《連者》失格だよ？」
少年はかすれた声で、なぜか困ったようにそうつぶやいた。
白い光に照らされ出す幻想的な闇の中、私はただただ、彼を見つめ

続けた。

幼年期の思い出：／／０３

「礼が遅くなってすまない。僕はブレンという、助けてくれてありがとう」
そう言って手当を終えた少年は、私に温かい牛乳の入った杯をくれた。
現在少年達一行は、野営を敷きながら怪我の手当をしていた。
「それにしても君はどこから派遣されてきたんだ？このあたりに《連》が駐屯しているなんてきいたことなかったけど・・・？君、名前はなんという？」
ブレンの首には痛々しくも包帯が巻かれていたが、その他に目立った外傷はないようだ。
私を魅了した彼の瞳はなぜか今は、先ほどほど強い吸引力を放っておらず私はなんとか彼を凝視することを押さえれた。
「ヨゥン＝ハウスウェル・・・。この森を抜けたところの屋敷に住んでる・・・」
「ハウスウェル・・・？君はラクト将軍の子供なのか！？」
私の言葉をきき、ブレンはなぜか驚いたようだ。
「そう。父を知っているの？」
「知っているも何も、今回は彼を訪ねてきたんだ。彼の子供ということは・・・君は僕の従兄弟殿だな！」
「いとこ？」
幼いわたしには従兄弟という意味が分からず問いかけたのだが、ブレンは誤解し、こう答えた。
「ああ。君のお父上の姉が私の母だ。お父上が引退されて領地に引き篭まれてからはお会いしたことはなかったから、知らないのは無理もないか。」
そう言って彼は親しげに私の頭をくしゃり、となでた。
「しばらくは君の家に世話になることになっている、よろしくな。」

「！ヨゥンの家に住むの・・・？」
「ああ、そうだ。聞いていなかったのか？」
ふるふると私は首を振った。
元来、家族とは一歩距離を置かれている上に、今日など朝から風邪をひき、父以外の家人とは会っていない。その父も、会話など望めるような状態ではなかったので、彼の語る話はまさに寝耳に水だった。
「そうなのか？まぁ、将軍は子沢山と聞いているからそんなこともあるのかもな。年は幾つだ？」
「・・・たしか８歳とおもう」
「そうか！年下か！僕は１０歳で年上だから僕のこと兄さまとよぶといい」
そう言って破顔するとより一層私の頭をがしがしと撫でる。
後にブレン自身も末っ子で常々下の兄弟が欲しいと思っていたと聞き、彼の喜び様に納得した。
「ブレン・・・にいさま？」
私はその響きを心の中で反芻した。
ー一緒に住んで、兄様と読んで良いということは、この人はわたしの『家族』ということだろうか・・・？この優しい、頭をなでてくれる人が・・・ー
俯いていた顔を上げ、ブレンの緑色の瞳を見つめる。
こみあげてくる嬉しさをこらえきれず、私はいつのまにか微笑んでいた。
「あぁ、やっと笑ったな。ずっと岩みたいな顔しているから、変なところ将軍に似てしまったんだなぁと思っていたところだぞ。」
そう言ってブレンも笑った。
「それにしても、将軍の子供が《連者》とはな～・・・あぁ、しかしその様子だと《練使い》のほうか？どちらにせよ能力者というのならこんな夜中に迎えの使いとしてくるのも納得だな」
「れんじゃ？れんつかい？なあに？それ・・・それにヨゥンはお使

いじゃない。」
当時の私は、家庭教師がついており一般教養はあれど他人との交流が極端に少なかったため、言葉遣いは幼く、常識知識や噂話に関してはとても無知だった。
そのため、田舎では滅多に関わることのない《連者》については全くの初耳だった。
「？だってさっきヨゥンは連能力を使っていたじゃないか？」
「れんのうりょく？・・・これのこと？」
そう言って私は、腰掛けていた岩を叩いてみた。
岩はビシッという音ともに見事に真っ二つに割れた。
「これのことなら、よくわからない。さっき目がさめたらこんなふうになってた。・・・ブレン兄さまはしっているの？」
ドキドキしながら、私はブレンに問いかけた。自らの身に起きたことを不安に思っての動悸ではなく、「兄さま」と呼んだことでの動悸だ。
「なんてことだ・・・！じゃあヨゥンはさっき能力に目覚めたのか！！それなのに亜竜を倒すなんて・・・《教会》が知ったらきっとヨダレをたらしてヨゥンをほしがるぞ！」
そう言って笑うとブレンは私の頭をまたぐちゃぐちゃとかき回した。先ほどからブレンの言っていることは、難しい単語ばかりで理解不能だったが、よく笑い、頭をなでてくれるこの自称兄に私は暖かな感情を持ち始めていた。
「ということは・・・だ。《連者》でも、お使いでもないお前は、こんな時間に何をしていたんだ？子どもが出歩く時間ではないだろう？」
ブレン自身も子どものはずだが、大人びた口調で彼は私に問いかけた。
私がここにきたのは、ブレンたちの気配がしたからきたというだけなのだが、問題は「屋敷を抜け出した」ということだ。
私は慌てて空を見上げた。この頃の私は空に夢中になっており、星

空を見ただけで、おおよその時間はわかるようになっていた。
ーあと、数刻でみんな起きてくる・・・！ー
みんなと言っても、早朝の仕事がある屋敷の使用人たちだ。
しかし、彼らに見つかり、屋敷を夜中に抜け出したことを父親に告げられてしまえば、また折檻にあってしまう。
「ブレン兄さま！」
「お？なんだ？」
「ヨゥンは先に帰るけど、兄さままた後であえるよね！！？」
「あ、あぁ・・・？亜竜に襲われて予定が遅れたが、昼過ぎには屋敷につく予定だ」
その言葉に安心した私は立ち上がると、来た時と同じくらいの早さで駆け出した。しかし、すぐにあることを思い出し、ブレンの元にトンボ帰る。
「ブレン兄さま・・・！今、会ったこと、お父さまには言わないでね！でも、ヨゥンのことは忘れないでね！」
嵐のようにけたたましい様子にブレンは一瞬ぽかんとしたが、例の優しい笑顔で分かったと頷いてくれた。
「わかった。屋敷をこっそり抜け出してたんだな・・・あとでな、ヨゥン！」

これが、生涯の忠誠を誓ったブレンと私の最初の出会いだった。

幼年期の思い出：／／０４

ブレンの予告より少し早い、その日の昼前に一行は屋敷に到着し、父を始めとする家人に出迎えられた。
私はその様子を家人達とは離れた屋敷の門の屋根の上から眺めていた。見晴らしの良いそこは、門の外の街道を遠くまで見渡すことが出来、また、屋敷の入口からは死角になっているために、無作法を咎められる心配もなくブレンの到着を待ちわびることができたからだ。
ブレン達一行は、昨晩は見かけなかった馬に跨り、衣服も騎士のような正装に改められていた。
そうした格好で、父に手厚く迎えられている姿を見ると、ブレンの身分は相当に高いように思われた。
そんなもの思いにふけっていると、ふいにブレンはこちらを向き、あろうことか遠く離れた私を認め、こっそり笑いかけてきた。その微笑みを見て、胸から暖かいものがこみ上げてきたことを、私は今でも覚えている。

その日の昼食には家族全員が呼び集められ、そこには予想通り装いを改めたブレンの姿があった。
家族全員が集まったことを確認した父はブレンをこう紹介した。
彼はブレン＝トロオワ＝ハイネル、この国の第三皇子で恐れ多くも私たちの従兄弟であるという。
彼は生まれつき体が非常に弱く、皇都では病状が悪化したため『静養』の目的で、暫く我が家に身を寄せるということだった。
と、そう紹介されたのだが、私は同一人物とは思えないブレンの紹介に首を捻った。なぜなら目の前にいるブレンからは、病人独特のひ弱さは全く感じられず、むしろ幼いながらも父達騎士のような力

強い覇気すら感じられたからだ。
実際、後に聞いたところによると目的は『静養』ではなく、皇都で激化していた統皇の後継者争いからの『避難』が目的だったようだ。
そして、その後継者争いはその後3年間収まることはなく、ブレンはその間ずっと私の屋敷で暮らした。
そうして、その3年間は、私にとって何にも変えがたい大切な思い出となった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6250x/

君に会いたい

2011年11月21日23時46分発行